

## 科目区分 幼年教育科目 授業科目 小児保健

### 乳幼児来所による発達過程と医学知識を教育教授する小児保健の教育実践

担当教員 心理発達臨床専攻 加藤匡宏

#### 1.授業の外観と報告内容・改善点

学生は小児保健において、乳幼児から学童期(14歳時)まで子どもを取り巻く社会の中で小児の心身両面の健康増進を図るために必要な対応を学習し、適切な救急救命処置法、子どもの異常や病気を早期発見できる視点を獲得することを目標としている。学生は、乳幼児の抱き方、衣服の着脱、食事の世話、排泄とおむつ交換、乳幼児の身体計測、生理機能の測定、心肺蘇生法、神経系の発達評価、事故と応急手当、歯の健康、認定こども園での環境衛生について学び、保育士としての実践力を身につける。本講義は保育士養成コースの必須科目であり、小児保健の内容は、小児の発達の理解、医学の基礎知識を教育教授する科目である。筆者は、保育士コースにおいて、小児期に発症発見されやすい疾患(知的障害、自閉症)などについても分野横断的に教育を実施した。受講生は幼児教育の学生18人であり、幼稚園教諭免許取得とともに、保育士資格を獲得することを目指している学生である。今回、0歳児から修学前幼児および父親に來校いただいて幼児の発達過程と父親の育児環境の体験を語っていただく実習型講義を実施したことにより、座学中心となる小児医学講義と体験実習型講義を2つの柱とした。学生の学習成果と事後学習を評価するために、授業開始30分を「前回の講義内容の確認」として「講義のまとめ」の発表時間として、担当教員が前回の講義内容を黒板の板書し、担当学生がプレゼンテーションを行った。学生は前回講義の確認資料を作成し、それに学生の学びの情報を加え、他の学生に内容提示するスキルを身につけ

ることを目標とした。また、発達障害児を抱えた父親の心労については来所日に説明をいただいた。本講義では、「こどもの保健」(教科書および講義用補助プリント)を使用し、専門用語の定義、用語解説を実施した。乳幼児来所日以外は、学生は、「こどもの保健」のみならず、ウイルス感染症・アレルギーの病態メカニズムの解説を聞くという一方向性の講義形態となるが多かったが、学生が講義中に解らない箇所はその都度質問を受け付けた。

#### 2.地域社会を核とした教育

座学の知識では、乳児を扱うことはできない。それに代わる教材として乳幼児2人に來所いただき、乳幼児の動きを体感いただいた。認定こども園が入所させる最年少乳児、父親の思い、保健福祉制度について知ることは、認定こども園を中心とする母子地域コミュニティに対する小児保健と乳幼児の発達の教育の核となる。

#### 3.学生の感想 アンケートによる学生の感想(自由記載)

「今まで自分が知っていた知識に加えて、感染症予防対策やコロナウイルス・免疫機能について知識を深めることができた」「発達障害や精神病との関連について学ぶことができた」「セントラルドグマなど高校理系生物の範囲が難しかった」「PCR検査などコロナ感染症で有名になった言葉の意味を理解できた」「乳幼児2人が、1か月ごとに來所いただいたので子どもの発達を直にみることで教科書にない学びとなった」天使ママの会などSIDSで子どもを亡くした母親の支援活動を知ることができた」「社会福祉制度など保育士と

して知るべき知識の学びが深まった」「講義振り返りがあったことで自分でも深く調べ自分の言葉でまとめることができた」「他者の発表を聞くことでより学びが深まった」「子どもの健康や保護者の思いについても考えることができた」「福祉制度・社会保障制度について保育士として現場に出た時、知っておくべき知識が身に付いた」「出産に関する行政手続きや母子手帳の発行について知ることができた」「身の回りにある幼児の危険物と危険回避を学ぶことができた」「保育士としての仕事イメージがわいた」「子どものアレルギーやアレルギーについての知識が学ぶことができた」「育児環境整備や課題を見つける力を醸成できた」「病弱保育の現状を知ることができた」現場情報の提供もあった。また、母親からの意見を聞くだけではなく、育児の工夫を私たちがするべきだった」「子どもの病気やアレルギーなど実際の現場で重要になる知識を得ることができた。精神障害者年金や身体障害者年金の支給の仕組みを知ることができた」などが感想である。

#### 4.まとめ

学生は、保育士資格は本コースを終了すれば取得できるが、こども園への採用試験対策を意識していた。小児保健という医学系科目について興味を保ちながら受講していたようである。筆者は、こども園採用試験に出題されそうな内容に特化するのではなく、こども園(特に病弱保育)で実際に役立つ乳児一般の知識を教育教授するようにつとめた。受講生が18歳であることから、保育士とは何をやる仕事なのかの具体的なモデルがわからない様子であり、乳児の特徴を観

察するだけでも十分であるように思われた。受講者は小児栄養・先天性代謝異常(酵素欠損症)など小児医学の専門性の高い医学分野について十分な理解することは難しいようであり、暗記するしかないとわりきった考えかたをしていた。本講義は、医学の基礎知識のみならず、実際の保育の現場を教育教授することに重きをおいた。受講生において小児保健という科目の実感はつかめたが、理論の体系理解については不明である。成書の知識用語を明確に使用できるかどうかはわからない可能性が高いように思えた。なによりも、主体的な学びが出来たこと、そのことに意義を見出してくれた学生が多くいた事に、授業者として強い喜びを感じた。今回は、乳幼児と父親に定期的に来所いただいたことで、発達について体験型講義を展開していたことに対して好評を得た可能性が高い。医学的内容が多く、高校理系生物を学習していない学生にとっては難解な座学であったことや解説のスピードが速すぎて、学生に疲労感を与えた可能性がある。さらに、深く突っ込んだ議論の必要性や資料の問題など、課題とされたことも考え合わせ、今後、より質の高い授業として展開したいと思う。